

訳者から 終わりに一言。

よつやく GOLD WARRIORS の日本版を送り出すことができました。苦節十ヶ月、我ながら苦勞しました。しかし、苦勞をした分、出来上がったものは可愛い我が子のような気がします。

YAMATO DYNASTY に継ぐこの大作は「宋王朝」、「マルコス王朝」と合わせ、シーグレイプ氏のシリーズ第四弾に当たる意欲作であります。YAMATO DYNASTY のなかで「黄金の百合」作戦として取り上げてあったものをもう少し詳しく説明したものとさええます。

幻の黄金伝説と言われる「山下金塊」が本当にあったのかどうか。また、皇族がそれに関与したのかどうか。最終的にその金塊がどうなったのか。マルコスが何故政権を追われたのか。小野田少尉がどうしてルバング島にいたのか。これらすべてがこの本で明らかになる。

さらに、自民党に起こった大きなスキャンダルとは何だったのだろうか。読者は、まったく知らなかった真実に驚きを隠せないだろう。私も英訳しながらアーツと声を上げた事も一度や二度ではない。

田中角栄の「57年債」とはなんだっただろうか。おそらくほとんどの読者はまったく思いもよらない事であろう。もちろん私もどきどきしながら訳をしました。とんでもない事が国民の知らないところで行われていたのです。

さて、このシーグレイプ氏について紹介しましょう。「宋王朝」の中で紹介されているので引用させてもらう。

スターリング・シーグレイプは一九三七年、一九世紀以来、代々アジアで宣教師をつとめるアメリカ人の家系に生まれた。当時、父親のゴードン・シーグレイプはパプティスト派の医療宣教師として、ビルマ奥地の病院で働いていた。その父とともに、少年時代をビルマと中国の国境地帯で過ごした著者は、長じてのち、カリブ海からラテン・ア

メリカ沿岸を巡回する貨物船の機関室で働きながら、アメリカの大学で建築を学ぶ。

ペンで仕事をするようになったのは、シカゴの新聞の通信員に雇われて、フィデル・カストロ率いるキューバのゲリラ部隊に潜入したときからであった。そしてボルチモアの新聞から「ワシントン・ポスト」に移り、国際欄の編集に携わる、

一九六五年、アジアに舞い戻ったシーグレイプは、フリーの記者としてバンコクを拠点にアジア各地から「ライフ」「リーザーズダイジェスト」などに原稿を送り、さらに雑誌の編集やテレビ・ドキュメンタリーの制作まで幅広く活動した。

一九七五年以降はワシントンで著作に従事し、これまでにアフガニスタンとラオスにおける化学兵器を題材にした「黄色い雨」(翻訳、原書房)など二作を世に問い、本書は三冊目の仕事である。

著者によれば、本書ははるか以前の中国に暮らした時代から始まった個人的な調査の結実であるが、本格的な資料収集と執筆準備が始まったのは一九八〇年ということである。既存の研究業績の再検討に加えて、宋一族のメンバーが足跡を残している全米各地で、ナマの資料の発掘が協力者の手を借りて行われ、さらにアメリカの情報公開法にもとづいて、国務省や連邦捜査局の記録文書からも数多くの事実を引き出している。(引用以上)

さて、著者のシーグレイプ氏というのは何者であろう。二冊を翻訳しながらいつもこれを考えていました。只者ではないのです。これだけの内部情報を暴露し、暗殺もされず出版出来ること自体、彼が単なる作家ではない事は明らかでしょう。

しかし、二冊を丹念に研究すると、おぼろげながら彼の本性は見えてきます。私の歴史観として、世界でおきる戦争はある特定の組織によ

って引き起こされたものと理解しています。つまり、日本を戦争に引き込んだのはあくまでアメリカではなく英国だったと思うのです。

しかし、シーグレイプ氏は英国の謀略には一つも触れていない、その上、英国が戦後、アメリカに主導権を握られたかのように描いている。なぜ裕仁が戦後責任を問われなかったのかは Yamato Dynasty の大きなテーマだったが、私にはその点で納得がゆかなかった。

確かに大英帝国は没落したかもしれない、しかし、英国王室は絶大な権力を今でも維持している。今でも世界の支配者の一員なのだ。

さらにこの本の裏テーマが金の争奪戦だった。戦後一貫して続いていたのは金塊を巡る世界戦争だ。これは最近発売された鬼塚英昭氏の「金の価格の裏のウラ」で詳しく分析されている。つまり、世界各国の中央銀行に備蓄されていた準備金がついに「金カルテル」の陰謀の中ですべて奪われてしまったのだ。

Gold Warriors の中を注意して読むと一応重要な事は書いてある。しかし、本質的なことはあえて書かれていない。彼は十分そのからくりを認識しているはずだ。スイスとロンドンにいる悪魔たちは、ロンドンとニューヨークの先物市場で勝利を収め、もはや世界の金塊はスイスの山の中に隠匿されたと言う。この陰謀はすごい。

日本は英国と同盟を結び、世界の強国となったはずが、裕仁が皇太子の時、英国を訪れた後、突然同盟が破棄された。

私が思うのだが、ガーター勲章を授与された日本の国家元首がこのように裏切られる事はおかしい。やはり、密約があり、裕仁は英国の計画の通り行動を取ったものと私は考える。

そうでなければ世界で一番規律ある日本陸軍があのような虐殺をするはずがない。明治以降、日本は英国に教えられ、植民地の管理のしかたを教わったに違いない。

日本の役割はロシアと共同して、アジアを大きな共産主義帝国にすること、そして、アジアに貯め込まれた金を集めスイスに送ること。同様にナチスドイツの役割は、ヨーロッパでユダヤ人が溜め込んでいた金塊をスイスに集める事だった。ヒトラーを君臨させたのもすべてユダヤ組織の筋書き通りだ。

何かが狂ったとしたら、ルーズベルトが予定外に早く死んだ事ではないだろうか。反共産主義のトルーマンが大統領になり、予定はずいぶん狂ったはずだ。しかし、戦後六十年をかけてついにこの本が発売されるころに世界の金をロスチャイルドは手に入れた。

シーグレイプ氏が真実を述べるとしたらそこは書くべきだろう。書かないと言う事は、彼がZigのエージェントであることを証明する。この本を読まれる方に注意をしたい。つまり、おおむね真実が書かれている、しかし、書かれていないことはたくさんあるのだと言う事を。

彼は、バーチ協会、ニクソン、共和党、マッカーシー、マッカーサーを嫌悪しており、冷静に見て片手落ちである。

裕仁、牧野、吉田、木戸等が陰謀を巡らすにしても限度がある。私たちは百年スパンで物を考えている陰謀組織と相対していることを忘れてはいけない。そしてもうほとんどノックアウトなのかもしれない。

日本が戦後繁栄したのはシーグレイプ氏の言うとおりアジアで略奪した財宝を役立てた事は間違いないだろう。しかし、戦争に巻き込まれていなかったらもつとすばらしい国になっていたに違いないのだ。

戦争とは一部の者だけが潤う陰謀であり、正しい戦争などどこにもない。国民は常に紛争に反対し、戦争に至らない様に政府を見守る必要がある。もう一度国土を蹂躪されないためにも。

平成十九年十二月六日

穴木 麻余

